

Glen Gillen (著), 清水 一, 他 (監訳)

脳卒中のリハビリテーション—生活機能に基づくアプローチ (原著第3版)

山本 伸一

(山梨リハビリテーション病院, 作業療法士)



本書は, *Stroke Rehabilitation: A Function-Based Approach (3rd ed)* が原著である. 日本の OT のために本書を届けたいという情熱のもと, 広島大学の清水 一先生, 宮口英樹先生, 広島市立リハビリテーション病院の松原麻子先生らを中心に訳された新刊は, 待望の書籍だ.

まずは, サブタイトルがいい. 「生活機能に基づくアプローチ」である. 昨今, 生活機能や生活行為といった ICF を意識したリハが求められているだろう. しかし, それは新しいものではなく, いわば当然のアプローチでなくてはならない. 身体機能に偏った, または認知機能に偏ったものではなく, 心身構造, 活動, 参加のバランスのよい包括的な介入が作業療法であり, リハの本来のあり方といえる. 「生活」という大きなテーマをもっているリハは, 活動の特性や対象者の身体内部で起きている事象の背景を評価と治療の中で見だし, OT による介入を成立させていくことが不可欠といえる. それらを再確認できるどころか, 納得づくめの内容で読み応

えのある書籍であった.

本書は, 31 章から成る長編である. まずは, 脳卒中患者の病態生理や医学的管理等の基本的知識から始まる. 発生機序と病理, 診断・検査, 介入の基本的姿勢といった急性期に必要な情報が満載だ. 続いては, 課題指向型アプローチに関することはもちろんのこと, 運動制御, 体幹機能, バランス障害, 前庭系等, 日本の OT が苦手な分野にもページを割いていることに驚かされた. 脳卒中患者の場合, 単純な反復練習では限界もある. 活動の効率的な自立は, 中枢神経系にとって複雑でもあり合理的といえる. そのため短絡化した学習は, 自律的行為になるとは言いがたい面もあるだろう. これらの章は, 疾患の背景を理解したうえで作業療法が成立するという著者の強いメッセージが感じられるのではないだろうか.

さらには, 基本動作だけでなく, 歩行や知覚-認知障害の治療, 言語障害・発話障害へ展開する. 脳卒中後の子育てや自動車運転, 住宅改修, 余暇活動と IADL に関しても余念がない. 各項目ごとで

ケーススタディによる具体的介入も提示されている. その章を深く理解することができるだろう.

個人的に目を引いたのは「性機能と愛情行為」といった日本ではなじみの薄い作業療法分野にも着手している点である. 国によっては文化や考え方の違いがあるものの, 障害をもたれた方々の大きな課題である. 対象者の悩みを解決するために, OT は生活のすべてを理解し, それを自分の引き出しとしてもつことが求められていることを感じさせていただいた. 私たちそれぞれの臨床に参考となることは間違いない.

「生活機能」に対する作業療法を網羅しているといっても過言ではない. 人間であることのその深さを思い知らされる書籍である. 自分の臨床の浅さに反省しつつ, また前を向いて行こうと勇気づけられた. ぜひ, 熟読していただきたい. 自信をもって, そうお伝えできる一冊である.

B5 判 856 頁 8,000 円 + 税
三輪書店 刊
☎ 03-6801-8357